〔茶傳集十〕一爐ぶち　塗下檜木、栗、シホシ、桑、黑柿、ケヤキ、櫻、松、杉、四疊半ハ多眞ぬり、春木地、三疊以下侘座敷は夏冬木地も吉、塗緣ならば薄塗よし、高サ二寸一分半とも云、疊ハ一分高ニ居ル、

〔三百箇條上之上〕一圍爐裏五とくすへ樣之事

口傳曰、一ッ爪の方少し廣くすべし、總別一ッ爪、ざしきによりておき所替るもの也、書付がたし、乍去大むかしのざしき、後床にて左右向あがりの有之ざしき、前に一ッ爪置候四疊はん、左に床の有ざしき、左へ出爪をする也、大身のざしきとては一ッ爪右也、一疊はんにては一ッ爪向におく、風爐の如くにする也、如此申候へば一ッ爪床へ付、あがりの方に二ッ爪をと申樣にて候得ども、亦一疊はん并にふろにては、向へ一ッ爪置候ゆへ、さのみ座へとも、あがりの方へ向とも難申、人々尋し時は、とかくざしきに寄候とこたへ可申候哉、

〔茶道望月集十七〕一イロリフサグ心得嗜とは、爐中の灰を皆、掬上グて、能ふるいぬきて、霰灰みぢん灰は分ン〳〵にして、杉の桶か大壺かの類に入て、夫へ濃きあくをすゝぎて、夫にて灰心の能程に打ゑめして、土藏の下屋か、其床かの下の、ゑめり氣の有所に、ふたを能して取置事よし、扨來る開爐の刻、其灰を出し候時は、色能黃ばみて見事に成て有物也、其時霰灰を能打まじへて、冬中春かけて用る事よし、古流には霰の餘りこまか成は不好、一分四方、一分に二分計にても丸み有を好也、此霰灰は分ンに求るにあらず、則爐中のこげ灰を、右の大キサニクダキ、あくにて能ゑめして、右に云如く半年中嗜み置時は、能霰灰何ほども出來する事も可知、風呂の灰も、當時は色白き宇治のほいろ灰とて用る事なれども、夫に不及、古法は只爐の灰を隨分こまかなるすゐのふにてふるいぬきて、是を用る事と可知也、

一爐の五德は、此時揚ゲて能洗ひ、ふき切て風透の所に、又一向古き重寶の五德ならば、箱に納て置事也、